

# 旧江戸川水辺の歴史

## 旧江戸川の航路を照らした常夜灯



行徳船場に建てられた常夜灯 (常夜灯公園)

1812(文化9)年、江戸と行徳を結ぶ(行徳船)の安全祈願のために建てられました。

行徳船は塩やさまざまな物資を運びました。

やがて、成田詣でに訪れる人々で

にぎわうようになり、俳人の松尾芭蕉や『東海道中膝栗毛』の作者である十返舎一九、渡辺崋山などが利用しました。

## 塩づくりで使われた篠崎ざる

旧江戸川の西岸にある篠崎は、かつて竹や笹が生い茂っていました。そのため、農作業がない時期になると、農家は竹を使ってかごやざるなどを編んでいました。篠崎で作られたざるは、行徳の塩づくりにも使用されました。



塩づくりで使用された篠崎ざるとささら 市川歴史博物館所蔵



河原の渡しへ向かう途中に建てられた石造道標



1920(昭和5)年 湊の渡しの様子

旧江戸川は、昭和20年過ぎごろまで東京(江戸)と利根川流域の沿岸を結ぶ水運で利用されていました。江戸川小学校の対岸にある行徳は、徳川家康が江戸に入る前から塩づくりが行われていました。その後、江戸幕府の保護のもと、行徳で作られた塩は旧江戸川の水運を利用して江戸まで運ばれました。

## 前野村の農業を支えた農業用水路



東井堀親水緑道 (東井堀跡)

旧江戸川は河口に近く、川の水には塩分が含まれていました。そのため、現在の江戸川学校のある旧前野村や周辺の村では、東井堀

や篠田堀の水を使い、稲作や畑作を行いました。

このほか、葛飾区北部の小合溜井から小岩用水や西井堀、中井堀の用水路をつくり、江戸川区内の農業に利用されました。

旧江戸川は川幅が広がったことや江戸幕府の命令により、橋をかけることができませんでした。明治時代になると、現在の江戸川小学校や篠崎ポニーランドの近くなどから、対岸へ渡し舟が行き交いました。その後、大正、昭和と渡し舟は利用されましたが、高度成長期を迎えるころには姿を消しました。